



リストラ 血肉の復讐者

男は復讐のために美女を食肉として...

作者 大黒遠也

官能人肉食小説『リストラ 血肉の復讐者』

一、作品紹介

一年以上にも及ぶ苛めの末に、会社を追われたサラリーマンが、それが原因で妻子を失い、失意の末に復讐を決意する。

二、登場人物

瀬戸<sup>せと</sup> 雅也<sup>まみや</sup>

会社から組織ぐるみの苛めを受け、最後には解雇される。それが原因で最愛の妻子を失い、失意の中、復讐を決意する。

富田とみた 和夫かずお

雅也が勤めていた会社の重役。部下の室田とともに雅也に対し苛めを行う。陰険で残忍な性格を持つ。

郷田ごうだ 浩司こうじ

雅也の元上司。雅也に対し執拗な苛めを繰り返す。出世欲は人一倍強いが、能力は無い。部下には、横柄な態度で対応するが、上司にはからきし弱い、典型的な”駄

目上司”

武藤むとう 麗菜れいな

会社の同僚。社内で一，二位を争う美女。雅也を目の敵にしていた富田部長と不倫関係にあり、雅也に対し、苛めを繰り返していた。

三神みかみ  
彩あざ

麗菜に劣らぬ美女。郷田課長と不倫関係を続けていた。

麗菜同様、雅也に対し、女性特有の陰険な苛めを行っていた。  
いた。

三、目次

第一章 死別

第二章 覚醒

第三章 序曲

第四章 人肉料理

第五章 餓鬼

第六章 皆殺し

## 『本編』

### 第一章 死別

粉雪が舞っていた。クリスマスイブの午後九時過ぎ、街外れのバス停に、男が呆然とした表情で佇んでいた。年の頃は三十代半ばに見えた。二時間以上もその場所を動いていない。何度も男の前を循環バスが通り過ぎた。男は百八十センチ以上ある上背を持ち、カシミアのコートに赤いマフラーを首に巻いていた。左手に下げた紙袋から、リボンを掛けた包装箱が覗いていた。

彫像のようにじっとして動かない男に、バスを待つOとやサラリーマン達は、薄気味悪そうな表情をして、男を避けていた。最終便が来る五分前、男は懐から携帯電話を取り出した。

「もしもし。俺だよ」

「貴方。今どこなの？」

「これから帰るところだ。沙織は寝たのか？」

「ええ。さっき寝付いたばかりよ。沙織のプレゼントは

買ってくれた？」

「ああ。欲しがっていたTVゲームにしたよ」

「そうなの。喜ぶわよ。きっと」

男は、一瞬ではあるが、五歳になる一人娘の笑顔を思

い浮かべた。

「涼子……」

「何？」

男は少しの間、無言のまま携帯電話を握り締めた。

「首になったんだ。もう来なくていいと言われた」

「……」

暫くの間、会話が途絶えた。その間に、雅也は、この一年間、会社から受けた様々な苛めを思い出していた。

「そうなの」

電話の向こうから押し殺したような涼子の声が聞こえた。

「済まない……」

「何とか為るわよ。早く帰ってきて」

「わかった。すぐに帰るよ」

何度、チャイムを押しても、何の返答も無かった。一階の照明は点いていた。雅也は急に胸騒ぎを覚えた。植木鉢の下に隠しておいた合鍵を使ってドアを開けた。む

せかえるような匂いが鼻に付いた。ガスだ！雅也は袖で口を覆うようにして、中に走り込んだ。

居間に入り、裏庭へと続くベランダのガラス戸を蹴破った。一人掛けのソファアを窓に投げつけた。大音響がしてガラス窓が粉々に碎け散った。キッチンに走り込んで、ガスレンジの元栓を締めた。よろよろとした足取りで一階を探した。二人は和室に敷かれた布団の上に、寄り添うようにして横たわっていた。

「涼子！沙織！」

雅也は狂ったように二人にしがみ付き、身体を大きく揺さぶった。何の反応も示さない二人を抱き抱えるようにして、裏庭に続くベランダから外に飛び出した。

「誰か救急車を呼んでくれ！」



雅也は近所に向かって、声を限りに叫んでいた。二人を雪上に横たえ、再び激しく揺さぶった。

「沙織！パパだよ。どうしたんだ。目を覚ませ。覚ましてくれ……」

誰かが通報したのだろう。けたたましいサイレンの音が住宅街に鳴り響いた。

何度呼んでも、何度揺り動かしても、二人は何の反応も示さなかった。

すぐに救急隊員がかけつけてきた。二人をタンカに乗せ、救急車に運び込んだ。雅也も一緒に乗り込んだ。救急隊員が二人に対し、応急処置を始めた。雅也は二人の手を握り締め、目を閉じ祈り続けていた。病院の待合室で、雅也は両手で頭を押さえ、椅子に座り俯いていた。

ここに来て一時間の間、じっと動かなかった。ICU  
では医師達による手当てが行われている筈であった。

「瀬戸さんですか？」

誰かが、雅也の肩を叩き、そう言った。

「……」

雅也は、憔悴しきった顔を上げた。正面に背広姿の男  
が二人立っていた。

「道警の成田です」

男は懐から取り出した警察手帳を提示した。

「署までご足労願えないでしょうか」

名前を名乗らなかつた方の男が、頭を下げてそう言っ  
た。

「何を言っているんだ！こんなときに」

雅也は立ち上がった。

「その件で色々とお聞きしたいことがあるんですよ」

二人の刑事はいつの間にか、雅也の両サイドを固めていた。

街外れにある市立斎場は、喪服姿の老若男女で溢れかえっていた。何組も葬儀が同時進行で進められていた。

正面玄関に一台のタクシーが止まった。後部座席から、雅也が降り立った。

警察署に連行された時に着ていた背広姿であった。寒風が吹きすさぶ中、コートは身につけていなかった。ズボンは皺だらけになり、ワイシャツの襟元も汚れが目立っていた。この三日間、警察署で妻子殺しの容疑を受け、

尋問を受けていた。バス停の目撃者によって、妻がガス自殺を図った時刻のアリバイが証明され、釈放されることとなった。ふらふらとした足取りで、火葬場の方角を目指した。すぐに瀬戸家という看板が視界に飛び込んできた。雅也はうつ伏せになり、凍結した路面に両手を付き嘔吐した。黄色い胃液しか出なかった。

気を取り直し、火葬場のガラスドアを開けた。参列者をかきわけ、奥へと進んだ。香を焚いたような甘い匂いが充満していた。炉の前に置かれた台座を取り囲むようにして、親戚達が竹箸を使って骨上げを行っていた。

「雅也……」

親戚の誰かが押し殺したような声で呼んだ。雅也は台座の前で棒立ちとなっていた。視線は宙を漂っていた。

「涼子と沙織だよ。雅ちゃんも拾ってあげて」

義母が目には涙を溜めながら、竹箸を差し出した。雅也は無言でそれを受け取り、台座の上に散らばっていた白い骨片を摘み上げた。竹箸を持つ手が、大きく震えていた。急に涙が止めなく流れ出した。

「涼子……。沙織！」

叫びながら、目の前にある骨片を口に入れた。口内に焼けるような痛みを覚えた。それでも止める事はできなかった。口に入れてはバリバリと噛み砕いた。

「雅也！」

親戚の男達が、遺骨を食べ続ける雅也を取り押さえようとした。

「沙織！」

魂を揺さぶるような慟哭の叫びが、火葬場内に響き渡った。

## 第二章 覚醒

それから、半年の間、雅也は抜け殻のような生活を続けていた。市内で一人住まいをしていた妹の真由美が、雅也と同居して生活の面倒をみていた。今年で二十六歳になる真由美は市内にある商社に勤めていた。起きているときは、TVの前に座り、妻や娘が写っているビデオをぼんやりとした表情で見っていた。

夜中になると、雅也の部屋から押し殺したような啜り泣きが漏れてきた。妻や娘の名前を呼ぶときがあった。食欲がまったくなくなり、体重は激減していた。

真由美が何か話し掛けない限り、言葉を発することは無かった。

ある土曜日の午後、珍しくTV番組を見ていた。週刊誌を紹介するコーナーがあり、そこで、リストラの末に、妻子殺害の嫌疑をかけられたサラリーマンの記事を紹介していた。実名は公開しなかったが、雅也本人の事に違いなかった。

雅也は食い入るように、その番組を見ていた。番組が終わり、雅也は立ち上がった。

「ちょっと散歩に行ってくる」

真由美に一言言い残し家を出て行った。

翌日、真由美は雅也の部屋を掃除しているときに、ゴミ箱にバラバラに切り裂かれた週刊誌を見つけた。紛れもなく、雅也の記事が載せられたものだった。それを見



た真由美は、言い知れぬ不安を覚えた。

その日の夕方、キッチンで真由美が夕飯の支度をして  
いるとき、雅也が背後に立って話し掛けてきた。

「お前には世話になったな。これ受け取ってくれないか」

「どうしたの？お兄ちゃん」

真由美は、水に濡れた手をタオルで拭いて、雅也が差  
し出したポストンバックを受け取った。

「何なのこれ！」

ポストンバックの口を開けた真由美が叫ぶように言っ  
た。中にはぎっしりと札束が詰まっていた。

「涼子は俺に内緒で、保険に入っていたんだ」

「何で私に？」

「俺にはそんな大金必要ない。結婚資金にでも使えばいい」

い。旅にでも出ようと思っっている。その金はあるから心配するな」

翌日、雅也はガレージに籠もり、散弾銃の改造を行っていた。狩猟目的で購入した銃であったが、動物を撃つたことは無かった。気晴らしのために年に数回、猟に出て岩や大木を標的にしていた。ポンプ式の銃で、本来ならば七連発であるが、規制のため三連発に改造されていた。雅也は、弾装を改造することで七連発に戻そうとしていた。ポンプ式の散弾銃を改造した後、水平二連式の散弾銃の改造に取り掛かった。

二本束ねられた銃身を、金鋸を使って、三十センチぐら

いの長さに切り詰めた。銃床もノコギリで、短銃の銃握のように切断し、ヤスリで整形した。

作業は終日を要した。完成した二丁の改造銃に鹿撃ち用の九粒弾を詰めた。

こいつで至近距離から撃たれたら助かる人間はいないだろう。

雅也は、ガレージの壁に向けてポンプ式の散弾銃を構えた。見えない標的を狙っているかのように視線は熱を帯びていた。

### 第三章 序曲

そこは、街外れに位置していた。人通りがほとんどない市道に面した倉庫の敷地内に、富田のベンツが止めら

れていた。暫く使われることがなかった倉庫内部が、ランプの明かりに照らし出されていた。中には建築資材の廃材が堆く積まれていた。その近くの柱に、雅也の元上司である富田が素っ裸にされて、縛り付けられていた。

富田の前では、全裸に剥かれた麗菜が膝間付き、萎縮した男根をしゃぶっていた。麗菜も雅也の元同僚であり、会社で一、二の美貌を持っていた。年も若く二十歳を少し過ぎたばかりだ。

「麗菜。もっと気を入れろ！」

雅也が、ランボーナイフの峰で麗菜の肩を叩いた。麗菜の後ろに屈み込み、ギザギザになった峰の部分で無防備な股間を撫でた。沁みひとつない豊かな美尻が、わなわなと震え慄いていた。

「お願い。殺さないで……」

涙声で懇願した。

「誰が止めていいと言ったんだ」

雅也は、空いている方の手で麗菜の股間を鷲掴みにした。

「うっ……」

「これで犯してやろうか？」

ナイフの刃を麗菜の股間に当てた。麗菜は嗚咽を漏らしながら、口腔性交を再開した。暫くの後、雅也は麗菜の首筋にナイフの刃を押し当てた。

「そろそろいいだろう。もう舐めるのは終わりだ。今度は噛むんだ。思い切りな」

ナイフを持つ手に力を込めた。切っ先が首筋を傷つけ、

血球が零れ落ちた。

「何しているんだ。早くしろ」

「止めろ！止めてくれ！」

ぐったりとしていた富田が急に騒ぎ出した。

「喚くな。爺！」

雅也は、富田の男根を啜えたまま震えている麗菜の眼  
球に切っ先を近付けた。

「三つ数えるうちにやるんだ。さもなきや目玉を抉るか  
らな」

麗菜は一瞬、息を止めたかと思うと、顎に力を込めた。

「ギャー！」

富田は目を白黒させて、全身を震わせていた。麗菜の  
肩も力が入っているのかブルブルと震えていた。麗菜が

横を向いて、「べっ」と唾と一緒に赤黒い肉塊を吐き出した。雅也はナイフの切っ先で、噛み切られた男根の肉塊を刺し、意識を失った富田の口内に捻じ込んだ。

「今度は、玉を食い千切るんだ」

雅也は、床に手を付き、肩で息をしている麗菜に命じた。麗菜は、一瞬雅也を睨み付けたが、すぐに視線を逸らし、のろのろと富田の股間に顔を近付けていった。

「ギャー！」

息を吹き返した富田が再び絶叫を上げた。麗菜は辜丸のひとつを食い千切り、床に吐き出した後で、残るひとつも同様に食い千切った。彼らの背後からその様子を眺めていた雅也は、懐からスプレーを取り出し、自分の口を手で押さえながら、麗菜の顔に吹き付けた。麗菜の動

きが止まり、そのまま床に倒れ伏した。雅也は意識を失った麗菜を肩に載せ、そのまま外に出て行った。すぐに戻ってきて、ランボーナイフを近くにあったドラムカンに差し込んだ。中には、ドロドロとした真っ黒な廃油が満たされていた。首をうなだれ、息も絶え絶えな富田の前に立った。

「遊びは終わりだ」

手にした油塗れのランボーナイフを富田の醜く突き出した腹に、根元まで刺し込んだ。

「うっ……。た……。助けてくれ」

鼻水と涙を垂れ流して懇願する富田を冷たい瞳で見下ろしながら、刃先をこねくり回した。

「ううう……。…」



富田は白目を剥いて、低い唸り声を上げていた。血塗れのナイフを抜き取り、富田の顔のところに持っていき、右目をくり貫いた。血塗れの眼球を、足で押しつぶし、両耳をナイフで切り取った。富田は、全身を震わせながら、意味不明な言葉を発していた。雅也は重たいナイフを振り上げ、富田の右腕の付け根に叩き込んだ。十回ほどそれを繰り返した。腱が切断され、骨が鈍い音を立てた。右腕は皮一枚を残して胴体と繋がっていた。雅也は狂ったように富田の身体を刻み続けた。絶命しても止めることは無かった。

時刻は黄昏時、街外れにあるラブホテルの駐車場に、雅也が以前勤めていた会社の社用車が止まっていた。

裏口から五十代の中年男と、二十代の若い女が、腕を  
組みながら出てきた。課長の郷田 浩司と、女子社員の  
三神 彩だった。二人は不倫関係にあった。駐車場の片  
隅に止まっていたランドクルーザの運転席から、雅也が  
二人を見詰めていた。二人が社用車に乗り込んだ。すぐ  
に発進した。雅也が運転するランドクルーザも数秒後に  
ゆっくりと発進した。ラブホテルから市内までは交通量  
の少ない市道が、一本走っているだけだった。両側を雑  
木林に囲まれた直線路で、雅也はアクセルを踏み抜き一  
気に加速した。郷田が運転するクラウンを抜き去り、百  
メートルのところで停止し、Uターンするようにハンド  
ルを切った。社用車がランクルから十メートルの距離で  
停止して、クラクションを鳴らしてきた。雅也はランク

ルを道路の真ん中に停止させ、銃身を切り詰めた散弾銃を持って車を降りた。それを背中に隠すようにして、クラウンに近付き運転席の窓を手で軽く叩いた。窓が開いた。郷田の驚愕した表情が現れた。しよぼくれた中年男だった。

「よう。元気だったか？郷田課長様。社用車を使って不倫とはたいした度胸だな」

「……。せ……瀬戸君じゃないか」

「お前に君付け呼ばわりされる覚えは無いな」

不意に雅也は、郷田の襟首を掴み、隠していた散弾銃の銃身を口に捻じ込んだ。

「降りろ。頭を吹っ飛ばされたくなかったらな。彩。お前もだ」

数分後、三人を載せたランクルが、両側を深い森に囲まれた林道を走っていた。これまで対向車は一台も現れなかった。

ランクルの後部座席には、後ろ手を手錠で拘束された郷田と彩が、折り重なるように横たえられていた。クラウンは雑木林の奥に置き捨てておいた。

三十分ほど走り続けると広い草地に出た。そこにランクルを止め、二人を引きずり出した。郷田を立てせて、いきなり顔面にパンチを食らわせた。郷田は背中から雑草が生えた地面に倒れ込んだ。

「は……。歯が折れた！」

郷田は情けない声を上げた。

「起きやがれ。糞野郎！」

雅也は、郷田の襟首を掴んで、立ち上がらせ、腹部に蹴りを入れた。地面に膝を付いて蹲っている郷田の顎を蹴り上げた。血飛沫があがり、郷田がもんどりうって地面を転がった。地面に仰向けに横たわる郷田に馬乗りになって頬を殴りつけた。殴りながら、雅也は郷田による苛めを思い出していた。約一年の間、毎日のように、あること無いこと難癖をつけては、個室に呼び出され叱責を受けていた。ぐったりとして意識を失った郷田から離れた。

近くの地面に横たわり、震えている彩に近付き、ミニスカートを引き摺り降ろした。

「止めて！」

泣き叫ぶ、彩のパンティを切り裂いた。彩は長い足で雅也を蹴ろうとした。

雅也は、容赦のないパンチを鳩尾に叩き込んだ。

「うっ……」という呻き声をあげて、静かになった。

雅也は剥き出しにした臍に、人差し指を差し込んで掻きまわした。中は乾いていた。指先を抜き取り、Tシャツを切り裂いて、ブラジャーを筆り取った。

極上の裸体が、雑草が生えた地面に横たえられていた。むっちりとした太腿を押し広げ、股間に顔を入れた。ラブホテルでシャワーを浴びたのか、ボディソープの匂いがした。臍やクリトリスを噛み切るような勢いで舐めた。

市街地から遠く離れた山深い山荘前に、雅也のランク

ルが止まっていた。

その山荘は、雅也が以前勤めていた会社の福利厚生施設だった。冬場はスキー宿として利用されるが、夏場には、その辺りに目ぼしい観光名所が無いので、利用する者もなく閉鎖されていた。

その一室では三人の男女が全裸となつて交わっていた。彩と麗菜は、後ろ手に手錠を嵌められた状態で、ベッドの上に横たわる雅也の男根や睾丸を舐めていた。二人の膣やアヌスには、ロータが入れられていた。ロータによる刺激によつて、時より、眉間に皺を寄せ、仰け反るようにして果てた。雅也は彩をベッドの上に、うつ伏せにさせ、麗菜にアヌスを舐めさせた。同性の舌による愛撫に彩は悶え狂った。頃合を見て、雅也は彩のアヌスを怒

張した男根で一氣に貫いた。彩は全身を仰け反らせるようにして、痛みと快樂が入り交じった呻き声を上げた。

雅也は容赦のない注送を送った。放出の寸前で、抜き取り側で見ていた麗菜の口に押し込んだ。麗菜は、彩の糞に塗れた男根に舌を絡ませた。雅也は麗菜の髪を鷲掴みにして腰を激しく前後させた。喉の奥にすべてを吐き出した。

#### 第四章 人肉料理

深夜〇時過ぎ、雅也は街外れの公園に向け、ランクルを走らせていた。後部座席には、猿轡を噛まされ後ろ手を縛り上げられた麗菜が横たわっていた。麗菜は誘拐さ



れた時に着ていたTシャツとミニスカートを穿いていた。公園の駐車場には、他の車は止まっていなかった。雅也は麗菜をランクルから引き摺り下ろし、肩に載せて公園の奥に向かって歩き出した。片方の手にはウイスキーのボトルを持っていた。

百メートルほど進むと、焚き火の炎が見えた。大勢の浮浪者達が焚き火を囲むようにして座っていた。

「女を抱かせてやる。好きにしていぞ」

雅也は焚き火の近くに麗菜を置いた。近くにいた男にウイスキーを手渡した。

薄汚れた格好をした男達は最初、麗菜の方をじつと見詰めたまま動こうとしなかった。痺れを切らした雅也が、麗菜に近付き、ミニスカートを捲り上げた。むっちりと

した白い太腿と、黒いレース柄のパンティが男達の視線を貫いた。

男達が一斉に立ち上がった。先を競うようして麗菜に殺到した。大勢の手が、恐怖に震え慄く麗菜の全身に張り付き、タンクトップ、シャツやミニスカートを剥ぎ取った。パンティやブラジャーが紙のように引き裂かれた。

男達の中で最年長と思われる男が、全裸にむかれた麗菜の髪を鷲掴みにして近くにあった粗末なビニール製のテントの中に引きずるようにして入れた。

他の男達も二人の後を追うようにして中に入った。

薄汚れたダンボールの床に麗菜は、  
仰向けに横たえら



れた。男達が一斉に麗菜の裸身に群がった。

男が麗菜の太腿の合間に顔を入れて、貪るように膣を舐めていた。他の男はむっちりとした剥き卵のような尻の下に顔を入れて、アヌスを舐め回した。Dカップはある豊かな乳房も揉みしだかれていた。猿轡も外され、舌を吸い出され、しゃぶられた。膣を舐めていた男が、黒々とした男根を扱いて、麗菜の膣に突き込んだ。アヌスも男根で塞がれた。激痛が全身を走り抜けた。口にも異臭を放つ男根を突っ込まれ、喉の奥を突かれた。男達は入れ替わり立ち代り麗菜の膣やアヌスや口に精液を吐き出した。

猿轡を噛まされた麗菜が、全裸で両手両足を縛り付け

られ、調理台の上に横たえられていた。近くに調理服を着て、肉切り包丁を持った雅也が、麗菜を見下ろすようにしていた。麗菜に対して憎悪を抱く雅也から見ても、みごとな肢体を持っていた。寝ていても豊かな乳房は盛り上がったままだ。陰毛は剃毛したので、サーモンピンク色の膣が剥き出しになっていた。

「景山達を捕まえたよ。スナックで酔いつぶれていやがった」

「……」

麗菜は、額に大粒の汗をかいていた。大きな瞳を見開いて、雅也の持つ肉切り包丁を見詰めていた。

「そんなにこれが、気になるのか？大丈夫。物凄く切れるよ。これを使って奴らに極上の料理を作ってやる。最

後の晚餐って言う訳だ」

雅也は憑かれたような笑みを浮かべた。

「食材は、麗菜、お前だよ。お前、肉は嫌いであまり食べないと言ってたな。野菜と果物が好物だって？最高の食材になるな」

麗菜は雅也の顔を見詰め、嫌々するように首を横に振った。両手両足を拘束され、猿轡を噛まされた麗菜にできる唯一の意思表示であった。雅也は冷たい笑みを浮かべながら、麗菜の首筋に肉切り包丁を押し当てた。

「料理の時間だ」

一言だけ言って、包丁を持つ手に力を込めた。頸動脈が切断され、鮮血がシャワーのように噴出し、白い壁を朱に染めた。麗菜は白目を剥きながら失禁した。激しく



全身を震わせた。やがて震えは収まり、ピクリとも動かなくなつた。

雅也は肉切り包丁で、麗菜の腹を縦に切り裂き、中から血塗れの腸と肝臓を取り出した。それらを近くのシンクで水洗いした。肝臓は牛乳を満たしたボールに入れた。腸は内部に水を通し、排泄物を搾り出した。

次に、右太腿から一塊の肉塊を切り出した。それをミートグラインダーに押し込み挽肉に変えた。十センチの長さに切断した腸皮に、その挽肉を詰込んでいった。ソーセージの次は、シチュー作りに取り掛かった。テーブルの上に、腹を切り裂かれて横たわる麗菜の乳房を二つとも切り取った。左太腿からも一塊の肉塊を切り取り、俎板の上で一口大に成形した。

腿肉と乳房を圧力鍋に入れて、十五分ほど加熱した後で、適当な量の水を加えて、さらに炒めておいたタマネ



ギやニンジンを入れた。白ワインを入れて、一度沸騰するまで煮込み、それから弱火で一時間ほど煮込んだ。シチュー作りの合間に、メインディッシュに決めていた尻肉ステーキ作りに取り掛かった。

麗菜の死体をうつ伏せにさせた。女の命が凝縮された見事な美尻が雅也を誘っていた。何人もの男を狂わせた尻を目で犯した。腰を押さえつけ、肉切り包丁で尻の膨らみを一気に切り取った。赤身の尻肉をステーキ大に切り分け、フライパンの上で片面を強火で加熱した後、ひっくり返して塩・コショウし、弱火で焼いた。最後に前菜のサラダ作りに取り掛かった。剃毛した臍を、肉切り包丁で切り取った。それを俎板の上で細かくスライスし、ニンニクと高の爪を入れたオリーブオイルでさっと炒め

た。それらを、皿に盛ったレタスやトマトの上に載せた。

三日前に、開発課の山田や加藤などの四人の男達が、雅也によって山荘に拉致されていた。四人ともに富田や郷田の命令で、雅也に嫌がらせを続けていた。

薬で眠らされていた四人は、山荘の個室で目覚めた。窓やドアは頑丈な戸板で塞がれ、工具が無ければ脱出は不可能であった。

「山田。俺達誘拐されたのか？」

小太りで三十代半ばに見える男が、色白で痩せ型の同年代の男に尋ねた。

「たぶんな。あんまり覚えていないんだ。飲み屋で飲んで、それから帰ろうとして外に出た後の記憶が無い」

「俺もだ。何も覚えていない」

残りの男二人も立ち上がり、不安そうな面持ちで、室内を見渡した。

「部長の件と関係があるのかな」

山田が呟くように言った。

「奴の仕業なのか？」

「俺達も部長のように切り刻まれるのか……」

四人は顔を見合わせた。皆、青白い顔をしていた。その後三日間、四人はその部屋に閉じ込められた。食事は与えられなかった。部屋にはバストイレが付いていたので、排泄や水を飲むことはできた。

四日目の朝、四人が目覚めると、閉鎖されていたドアが開け放たれていた。

ドアの外から、食欲を刺激する匂いが漂ってきた。三

日間、何も口にしていない四人は、逃げ出すことも忘れ、ふらふらと匂いのする方に向かって歩き出した。匂いは食堂から出ていた。ドアを開けると食卓テーブルに、熱々のステーキが鉄板の上でジュウジュウと音をたてていた。大皿の上に山盛りのソーセージやカツが載せられていた。木製のボールには、大盛りのレタスやトマトや細かく刻まれた肉片が盛り付けられていた。食卓テーブルの中央に置かれた大鍋には、クリームシチューが湯気を上げていた。椅子はちょうど人数分セットされていた。四人は競うように席について、食べるようにステーキやソーセージを頬張り、サラダを食べた。

「どうなっているんだ？」

ようやく食欲が収まりかけた頃、山田が加藤に尋ねた。

「何がだ？」

「おかしいとは、思わないか？犯人は俺達に美味しい料理を食わせるために監禁したのか？」

「そう言えばそうだな。それにこの肉は初めて口にする。豚肉と羊の肉を掛け合わせたような味だ」

「毒を盛られたのか？」

四人は顔を見合わせた。

「さつきから気になっていたんだけど……」

「どうした？」

山田は、僅かに開いている厨房のドアを指で指し示した。

「最初は料理の匂いで感じなかったが、何か生臭くないか？」

四人は無言のまま立ち上がり、厨房のドアに近付いた。加藤がドアに手を掛け、押し開いた。中から、むせ返るような血匂が噴き出した。調理台の上に、血塗れになった人間の腕や足が散乱しており、隅には女のものと思われる生首が転がっていた。

「何だ。こりゃ！」

四人は腰が抜けたように、その場にへたり込んだ。

「美味しかったろう。麗菜の肉は？」

四人が一斉に振り返った。散弾銃を手にし、ベルトにハンマーの柄を差した雅也が、食堂へと通じる戸口で皆を見詰めていた。

「麗菜の肉だって……」

山田がテーブルに置かれた生首をじっと見詰めた。喉

に手を当てて、食べた料理を床に戻し始めた。酸っぱい匂いが、食堂内に満ちた。残る三人も床に嘔吐した。

「もったいないじゃないか？人生最後の料理なんだぞ」

雅也は四人に向かって散弾銃を構えた。

「待ってくれ！あ・あんたは何か誤解している」

山田が立ち上がり、ゆっくりと雅也に近付いてきた。

その時、加藤が雅也の目を盗むようにして、調理台の上にあった肉切り包丁を手にした。

「俺が誤解しているって。何をだ？」

「俺達があんたに辛くあたったのは、すべて、課長に命令されてやったんだ。本意じゃなかった」

「俺が降格されて、お前が後釜にすわったんだよな。郷

田は可愛いお前の為もあって、俺を排除したかったんだ

ろう。それともお前が入れ知恵したのか？」

「違う。信じてくれ！」

加藤は二人が会話している間に、ゆっくりと雅也に近づいていった。

「加藤。そのくらいにしておけ。そいつで俺を刺すつもりか？」

雅也は山田の影に隠れ、包丁を構えている加藤に声を掛けた。

「瀬戸さん。誤解しないで下さい」

「まあ。いいさ。どうせお前達はもうすぐあの世に旅立つんだからな」

「お願いします。殺さないで下さい！」

山田が床に手をつけて頭を下げた。肩先が震えていた。



「加藤。その包丁で山田を刺し殺せ。そうしたら助けてやってもいいぞ」

「……」

加藤は無言で、手に持った包丁と山田の背中を交互に見詰めた。

「三つ数えるうちに、首を切らなきゃ、お前の顔に撃ち込むからな」

雅也は、散弾銃の銃口を、加藤の顔面に向けた。

「ひとつ。二つ。み……」

「ちきしょう！」

加藤が、叫びながら、肉切り包丁で山田の首を、背後から切り付けた。

動脈を傷つけたのか、切り傷から鮮血が噴き出した。

山田は鼻水を垂らしながら、首筋に右手を当てて、泣き喚いた。

雅也はおもむろにハンマーで、床に蹲っていた山田の頭部を叩き割った。鈍い音がして脳漿が飛び散った。その時、加藤が肉切り包丁で雅也に切りかかろうとした。

散弾銃が火を噴いて、加藤の股間を粉碎した。衝撃で壁に跳ね飛ばされた加藤に向かって、散弾銃のスライドを引きながら雅也が近付いた。加藤は両目を大きく見開いて、激しい勢いで息をしていた。股間は血に塗れ、わずかに千切れた男根が皮一枚で繋がっていた。再び、銃声がして加藤の右膝から下が消し飛んだ。絶叫をかき消すように、連続して三発の銃声が、鳴り響いた。おびただしい鮮血や脳漿で汚れた床に両手足を吹き飛ばされ、

ダルマとなった加藤が、白目を剥いて意味不明の呻き声を上げていた。さらに一発の銃声がして、加藤の首から上が消失した。雅也は、厨房で腰が抜けて動けない残る二人の方に振り返った。

全身が返り血を浴びて赤く染まっていた。雅也は歓喜の笑みを浮かべていた。

散弾銃に散弾を補給しながら、二人に近付いていった。

二人に向けて全弾連射した。

一瞬の後、全身に散弾を打ち込まれ、蜂の巣になった

二人は息を引き取った。

四人が絶命しても、雅也は散弾を補給して四人に向けて発砲し続けた。原型を止めない肉塊になるまで止めなかった。

